

『リトル・ドリット』における二人の自虐者

田 中 孝 信

序 論

『リトル・ドリット』(*Little Dorrit*, 1855-57) に描き出された「社会という監獄」*"The Prison of Society"*⁽¹⁾に閉じ込められたほとんどの登場人物たちは、マーシャルシー監獄の囚人 ウィリアム・ドリット (William Dorrit)への末娘エイミー (Amy Dorrit) の没我的献身行為に代表されるように、忍従の姿勢を示す。ただ彼らが、苛酷で非情な社会を生き抜くために、時折、空想の世界に逃避するのも事実である。監獄の屋根裏部屋から窓外に目をやり夢想にふけるエイミーは言うに及ばず、左官の妻ミセス・プローニッシュ (Mrs. Sally Plornish) や、監獄の牢番の息子ジョン・チヴァリー青年 (Young John Chivery) は、空想によって田園を思い描く。社会の圧迫を理解できず途方に暮れる彼らにとって、ささやかな空想は、『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854) における場合と同じく、生きてゆく上で必要不可欠なものであり、自己のアイデンティティを維持するための手段なのである。

彼らとは対照的に社会に対して強硬な抗議の姿勢を示す人物の一人として、天涯孤独の中産階級女性ミス・ウェイド (Miss Wade) が挙げられる。彼女は、孤児という出自ゆえに激しい人間不信に陥り、心的マゾヒズムとも言うべき精神的こわばりに囚われた人物である。彼女に関しては多くの批評家が、彼女の分身たる、孤児の少女タティコーラム (Tattycorium) との同性愛関係を指摘したり、⁽²⁾ 彼女が物語る「ある自虐者の物語」*"The History of a Self Tormentor"* に見られる極度の神経症について論じている。⁽³⁾ だが、ミス・ウェイドの「もしわたしがどこかに監禁されて、苦しみ悩むようなことがありましたら、一生その場所を憎んで、焼き払ってやりたい、粉碎してやりたいと思うでしょうね」(I.2.22)⁽⁴⁾といつた叫びにも似た言葉には、「仕事ヤルベカラズ」という原則を標榜する迂遠省を頂点とした石化した社会を、根底から搖るがすだけの攻撃エネルギー、憎悪に満ちた反抗心が秘められているのである。

『リトル・ドリット』が社会批判的小説であれば、既成社会に公然と反旗を翻すミス・ウェイドには何らかの肯定的価値が付与されているのではないだろうか。本論では、この問い合わせに対する答えを、彼女と家父長制社会との関係、および作者の彼女に対する態度のなかに探っていく。

1. ミスター・ミーグルズとタティコーラム

ミス・ウェイドの社会への怒りは、タティコーラムを巡っての、後者を娘の世話係として引き取った中産階級人ミスター・ミーグルズ（Mr. Meagles）との確執を通して表わされる。このミスター・ミーグルズという人物は、迂遠省を牛耳るバーナクル一族（the Barnacles）を「あんな偉い方々！」（I.34.398）と言って称賛することからも分かるように、表層的価値にしか目を向けず、物事の本質を見極める力が十分ではない。⁽⁵⁾ 彼のこうした生活態度が、タティコーラムに接する際にも示されるのである。彼が彼女の心情を真に理解することはない。まず、彼が彼女につける「タティコーラム」という名前自体に問題がある。それは、孤児院の創設者コラム（Thomas Coram, 1668-1751）を連想させるために、彼女が孤児である事実をよりはっきりさせてしまう。にもかかわらず彼は、こうした名前をつけたのを「親切心」（I.27.320）からだとして満足する。それは、押しつけがましい一方的な温情主義であり、タティコーラムを一個の独立した対等の人間とは見なしていないことを示す。彼のなかに「恩着せがましい態度や利己心」（II.21.651）を見たミス・ウェイドによれば、タティコーラムは「善良さを見せびらかす一家のおもちゃ」（I.27.319）に過ぎないのである。いやそれどころか、氏素姓の分からぬ孤児は、「それ」「it」（I.2.17）と代名詞で言及される人間以下の存在でしかない。あるときタティコーラムは感情を爆発させ、自らを「惨めな」「miserable」、「勝ち誇られる」「exulted over」、「恥をかかされる」「shamed」（I.27.314）存在だと訴える。その件についてアーサー（Arthur Clennam）に語るミスター・ミーグルズは、彼女を「激しく息を切らしたあの子」「that vehement panting creature»（I.27.315）と表現する。まるで彼は、彼女を犬に譬えているかのようである。彼女が「辛抱なんてしてやるもんか」「'I won't have patience!'」、「気にしてやるわ」「'I will mind it!'」（I.2.26; Dickens's italics）といったふうに、意志を表わす“will”や“won't”を繰り返し使用するのも、人格を持った個人として認めてもらえない悲劇に端を発するのだ。彼女のそんな不幸を、善意の持ち主だが鈍感なミスター・ミーグルズは理解しようともせず、しばしば彼女が激情に身を任せたのを、孤児という不運な生まれゆえであるとか、「不運な気性」（I.27.312）のせいにする。

ミスター・ミーグルズは、タティコーラムに克己・自制を教えようとするばかりだ。家父長制中産階級社会という中心世界の秩序にとって脅威となる「他者」は、管理され矯正されねばならない。そのために彼は「ゆっくり時間をかけなさい——25まで数えるんだよ」、「もう25数えなさい」（I.16.191）と繰り返す。また、逸脱した行為に走ったときには、「彼女の手を取って、彼女の部屋に連れて行き、家のドアに錠をする」（I.27.315）。彼は彼女に、独房のなかで自らを律する機会を与えてるのである。彼は、彼女の教化を監視する看守であり、孤児院で始まった矯正療法をさらに推し進める代行者の役割を担うと言つてもよからう。「バスティユの錠や門だって、あの子を押し込めとくわけにはいきません」（I.27.312）という彼の言葉には、彼が彼女の教化をどう捉えているかが象徴的に示されている。彼は、彼女の激情を静

める他の方法を知らないし、知ろうとするわけでもない。彼女が彼の親切に表面上満足し服従しておれば、彼女の内面がどうであれ一向意に介さず、家庭の平和と調和は保たれると考えているわけである。

2. ミス・ウェイドとタティコーラム

ミーグルズ一家を「利己的なやつら」(I.2.25)と呼ぶタティコーラムが、彼らの監視から逃げ出し頼るのが、「奇妙な類似性」(II.21.651)を持つミス・ウェイドである。ミス・ウェイドは、その少女との間に「共通の連帯感」(I.27.323)が生じる原因を、二人がともに、社会が尊ぶ氏族姓を欠いているからだと判断する。彼女はミスター・ミーグルズに対して、「生まれの点では、あなたの壊れたおもちゃ〔タティコーラム〕とわたしは同じなのです。この子には名前がありません。わたしにもありません。この子の受けた不当な仕打ちをわたしも受けているのです」(I.27.323-24)と言う。タティコーラム同様、孤児ゆえにミス・ウェイドもまた、中心世界から見れば「周辺的存在」でしかないのだ。ジョン・R・リード(John R. Reed)が指摘するように、「女性であり、かつ孤児であるということは、家族が尊ばれ、男性が権力を握る時代にあっては、二重の意味で不利だった」¹⁰のである。ミス・ウェイドの両親について、ブリーディング・ハート・ヤードの地主キャズビー(Christopher Casby)のもとで働くミスター・パンクス(Mr. Pancks)は、次のように語る。

"I know as much about her, as she knows about herself. She is somebody's child — anybody's — nobody's. Put her in a room in London here with any six people old enough to be her parents, and her parents may be there for anything she knows. They may be in any house she sees, they may be in any churchyard she passes, she may run against 'em in any street, she may make chance acquaintances of 'em at any time; and never know it. She knows nothing about 'em. She knows nothing about any relative whatever. Never did. Never will." (II .9.524)

「あたしは彼女について、彼女自身と同じくらいのことを知っています。彼女は誰かの子供——誰の子供でもあり——誰の子供でもない。彼女の両親くらいの年齢の人を誰でもいいから六人連れて、ここロンドンの一室に彼女と一緒に住まわせれば、そこに彼女の両親がいるかもしれませんよ。たぶんね。彼女の眺めるどこの家のなかにも両親がいるかもしれないし、通りかかるどこの墓地にもいるかもしれないし、どこの街でも出会うかもしれないし、いつ何時知り合いになるかもしれませんが、彼女自身は気がつかないでしょう。彼女は両親について何も知らないのです。親類についても何も知りません。過去にも知ることはなかったし、今後も知ることはありますまい」

アイデンティティの欠如に身悶えする彼女は、己に注がれた愛情を、孤児に対する「虚栄心と優越感」(II.21.644)から生じた、横柄な憐憫の情と解釈する。彼女の目に社会は「親切、保護、慈善、その他諸々の美名をつけて膨れ上がっている、恩着せがましい態度や利己心」(II.21.651)が蔓延する空間と映る。

全ての人間への不信感に苛まれるミス・ウェイドが抱く被害者意識は、自らの出生に関する罪の意識と表裏一体を成すものと考えられる。その罪の意識を打ち消さんがために彼女は、社会に対して憤慨の念、生命の糧とも言える激情を募らせねばならないのだ。結果として彼女は、逆に孤児としてのアイデンティティを主張し、進んで「他者」として疎外されることで、鋭く社会に対峙しようとする。人と交わることなく絶えず空間を移動し、疎外感を味わうことで、自らの存在を確認するのである。彼女自身が社会に背を向け、己を閉じ込める監獄を構築し、自虐的な日々を送っていると言えよう。激情が引き起こす破壊エネルギーは、社会のみならず、彼女自身をも呑み込まんとするのである。この点で彼女は、自らを砥石にかける、『デイヴィッド・コパーフィールド』(*David Copperfield*, 1849-50)中のローザ・ダートル(Rosa Dartle)をさらに極端にした人物であり、『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)のヒロイン、エスター(Esther Summerson)が辛辣で偏執狂となった姿でもあると解釈できる。

ミス・ウェイドの内面は、第2部第21章の「ある自虐者の物語」と名づけられた告白文から明確に読み取れる。彼女は、厳格なミセス・クレナム(Mrs. Clennam)のもと孤児同然の幼少期を送ったアーサーに共感を覚え、手記を手渡す。この章に関する作者の覚書には、「彼女の視点から、それを分析せよ」“From her point of view. Dissect it.”⁶と書かれている。したがってここには、彼女が自らの気質と孤児の身分を内在化した上で、自分自身と周囲の人々の実体を彼女なりに「見破った」“detected”(II.21.644)結果が記されているのである。彼女は12歳のときから孤児だというので見下したような優しさを示され(patronised, II.21.644)，社会の外に置かれていると感じてきた。「気の毒な性格」(II.21.645)の持ち主だとして彼女のどんな言動をも許す社会に対して、怒りを増し、ありとあらゆる慈愛や親切を悪意と解釈する。彼女は、周囲の人間が自分に対して取る態度について、なぜそういう態度を取るのか、仮説を立ててはその真偽を確かめようと試みる。そして、その結果を、必ず自分の仮説の正しさを裏づけるものとするのである。さらに、親戚が一人もいない本当の孤児だと知ったとき、「この事実でもって過去と未来を照らし」(II.21.646)，疎外感を深めると同時に、自らを社会から引き離そうとする決意は強まる。

確かにミス・ウェイドの分析は全てが間違っているわけではない。周囲が彼女に対して「虚栄心と優越感」を少しも抱いていないと言えば嘘になるだろう。男は「奴隸市場」(II.21.650)へ行って女の全身全霊を買い、いかにいい買い物をしたかを他の男に見せびらかすのだという指摘は、『ドンピー父子』(*Dombey and Son*, 1846-48)のイーディス(Edith Dombey)を想起させ、当時の女性の置かれた立場を的確に突いている。また、ミス・ウェイドが生きるために

住み込みの家庭教師にならなければならなかったというのも、一般的に、その地位が家庭内でいかに不安定であったかを考慮すれば、彼女の自立心からくる屈辱感の激しさを照射する。

だが、ミス・ウェイドがナルシシズム的牢獄に閉じこもっていることを思えば、この物語を全面的に信じることはできない。彼女が世界を、彼女特有の偏執狂的観点から再構築したとする方が妥当だろう。物語は、「彼女自身の鏡」(II.20.641)として、彼女の歪んだ内面を映し出す働きを担っており、社会に対して攻撃的な姿勢を取る、屈折した自己の正当性を主張しているのである。この物語をアーサーに手渡したとき彼女は、彼が40歳の今日まで消極的な人生しか歩んでこなかったことを間接的に非難しているとも考えられる。

したがって、ミス・ウェイドがタティコーラムを迎えることは、同じ被害者のなかに「自己」を発見し、社会に対峙する孤児というアイデンティティを、より堅固なものにしようとする行為だと判断できる。しかし、それは、社会に対して自らの周囲に回らした精神的牢獄をますます堅固なものにするばかりでなく、彼女を極端なまでの自己陶酔症、すなわち、自己の投影たるタティコーラムとのサドマゾヒズム的同性愛という陥穀に投げ込むのである。

ミスター・ミーグルズには、なぜミス・ウェイドが、社会が中産階級女性に対して期待する役割を果たすのを拒み、彼の助力を受けつけようともせず、傲然と構えるのか理解できない。物語が進むにつれて彼の当惑は恐怖となり、最終的に彼女に対して嫌悪の情を抱く。彼にとって彼女は、自分が親切心から道徳的に更生しようとしたタティコーラムに潜む激情に火をつけ、病的に捩れた関係に陥れた元凶でしかない。物事の本質を見抜く力を持たない彼ではあるが、今回に限っては、彼女の内面についての指摘は正しい。

"I don't know what you are, but you don't hide, can't hide, what a dark spirit you have within you. If it should happen that you are a woman, who, from whatever cause, has a perverted delight in making a sister-woman as wretched as she is (I am old enough to have heard of such), I warn her [Tattycorium] against you, and I warn you against yourself."
(I. 27.323)

「あなたが何者かは知りませんが、あなたが心の内に暗黒の気性を持っていることは、あなたも隠されないし、隠せることでもありませんぞ。もし万一、原因が何であれ、あなたが同じ女性の仲間を自分と同じ不幸へ陥れることに、ひねくれた喜びを感じているような女性（わたしだってこの年ですから、そうした例を聞いたことがあります）だとしたら、わたしはこの子〔タティコーラム〕にあなたに気をつけるように言いますぞ。あなたもご自身に気をつけられることです」

このときミスター・ミーグルズは、ミス・ウェイドのタティコーラムに対する態度のなかに、少女を自分もろとも破滅へと導く支配－従属構造を、無意識のうちに読み取っているのである。

3. タティコーラムのミーグルズ家への復帰

これまで見てきたように、作品では、ミスター・ミーグルズの社会観、およびそれを反映したタティコーラム矯正手段の持つ問題点が指摘される一方で、社会に反抗するミス・ウェイドの精神的こわばりが危険視された。しかしながら物語は、ミス・ウェイドの置かれた惨めな状況に理解を示しながらも、しだいにミスター・ミーグルズが唱える理性・秩序を回復してゆく。その過程で取り上げられてくるのが、ミス・ウェイドとタティコーラムの関係に見られる支配-従属構造なのである。

ミス・ウェイドは自分を、タティコーラムを「奴隸の境遇と被害者意識から救い出し」(II.21.651) た解放者と見なす。少女の名前を「ハリエット」に戻すことで、ミスター・ミーグルズの影響力を排除しようとする。だが、実際は少女を支配しようとしているのではないだろうか。タティコーラムがミーグルズ一家を去った後、少女を取り戻そうとミスター・ミーグルズがミス・ウェイドを訪ねて来た場面から、それは読み取れよう。ミス・ウェイドは、ミーグルズ家での少女の立場が「引き立て役」、「奴隸」、「おもちゃ」だったとして、少女が彼らのもとで抱いていた屈辱感に火をつける。

"You[Tattycorlum] can be, again, a foil to his[Mr. Meagles'] pretty daughter, a slave to her pleasant wilfulness, and a toy in the house showing the goodness of the family. You can have your droll name again, playfully pointing you out and setting you apart, as it is right that you should be pointed out and set apart. (Your birth, you know; you must not forget your birth.) You can again be shown to this gentleman's daughter, Harriet, and kept before her, as a living reminder of her own superiority and her gracious condescension." (I.27.319)

「あなた〔タティコーラム〕はもう一度この人〔ミスター・ミーグルズ〕のかわいらしいお嬢さんの引き立て役になり、彼女の楽しい我がままの奴隸になり、善良さを見せびらかす一家のおもちゃになることもできます。もう一度ばかげた名前で呼ばれ、からかい半分に指をされ、差別されることもできます。あなたが指を指され、差別されるのは当然のことなのですよ（いいですか、あなたの生まれのせいなのです。あなたの生まれを忘れてはいけません）。ハリエット、あなたはもう一度この方のお嬢さんのもとに連れて行かれ、お嬢さんの優越感と思わせがましい優しさを満足させる生きた見本として、養われることもできます」

これは、彼女なりの「真実」をタティコーラムに吹き込んで、少女の社会に対する怒りを煽ることで、自分の意のままに操れる人物に矯正しようとしていると解釈できる。自分が受けた不当な扱いをタティコーラムが受けた不当な扱いに投影し、少女に「周辺的存在」であることを叩き込む。その過程において、彼女に支配権を振るうのである。ミス・ウェイドは少女のなか

に、自分の分身のみならず、支配されるべき人物をも見て取るのである。

ミス・ウェイドとタティコーラムの力関係は、ミス・ウェイドの少女に対する所作からも明白である。彼女は少女の手を引き、「かばうように」(I.27.320) 少女の首に片手を当て、「これでもう永久にわたしのものよ、と言わんばかりに少女の腰に腕を回」(I.27.323) す。これ以降ミス・ウェイドには、彼女があれほど非難したミスター・ミーグルズと同じく、タティコーラムを監視し幽閉する看守のイメージがつきまとう。事実、少女は、初めて会ったときからミス・ウェイドに「見られ」(I.2.25) るのをこわがっていたし、ミス・ウェイドとの生活のなかで、自分が「惨めな従属者で奴隸」(II.20.643) でしかないと認識している。自虐的女性と孤児が作り出すこうした力関係は、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61) のミス・ハヴィシャム (Miss Havisham) とエステラ (Estella) の関係に至って、さらに詳細に検討されることになる。ミス・ウェイドもミス・ハヴィシャムも男性に捨てられたことによって苦しみ、家父長制社会への復讐の道具として孤児の少女を使うのである。

ミス・ウェイドのタティコーラムに対する態度は、社会から自分が被った圧制を、別の孤児への支配を通して、再生産していると言える面を持つ。家父長制の権力の再生産は、タティコーラムの名前を「ハリエット」という孤児院時代の名前に戻そうとする態度にも窺える。彼女はこれによって、ミスター・ミーグルズの影響力を少女から排除しようとしたのだが、「ハリエット」という名前自体、孤児院が恣意的につけた名前であるために、少女はその名前によって、逆に孤児としてのアイデンティティを思い知らされることになる。それは、本質的にミスター・ミーグルズが少女にしたのと同じことなのである。いや、彼の方は、「ハリエット」という名前が権力によっていい加減につけられたものであったために、それを変えたのだった。その点を考えれば、もとの名前に戻すというミス・ウェイドの行為は、結果的に、彼以上に体制維持に貢献することになる。これと同じことは、彼女が、タティコーラムの社会に対する憎悪を搔き立てるために、繰り返し孤児であることを思い出させる行為が、同時に社会が少女に貼った「周辺的存在」というレッテルの正しさを少女に刷り込むことになる点にも表われている。

タティコーラムは、ミス・ウェイドによる支配が結局、ミスター・ミーグルズとの関係のなかで自分を束縛したものと変わらないことを見抜く。

"And because I have nobody but you to look to, you think you are to make me do, or not do, everything you please, and are to put any affront upon me. You are as bad as they [Mr. and Mrs. Meagles] were, every bit. But I will not be quite tamed and make submissive."
(I.20.643)

「それに、あたしにはあなたしか頼る人がいないもんだから、あたしにあなたの好きなことをやらせたり、やらせなかつたりして、あたしを侮辱してもいいと思っているのね。あなたも結局、あいつら〔ミーグルズ夫妻〕と寸分違わない意地悪なんだ。でもあたし

は絶対、おとなしく言いなり放題にはならないからね」

幽閉からの解放と思われたものは、新たなる幽閉でしかなかった。解放を求めて少女は、ミス・ウェイドに猛然と反抗する。分身と分身との対決は、ミスター・ミーグルズに対する反抗とは比べものにならないほどに、エネルギーを消耗させ、自己をも破滅させる危険を孕む。「閉ざされた暗い部屋のなかで、お互いに自分の怒りを胸のなかに燃やし、お互いに自分の胸を切り苛み、相手の胸を切り苛もうと決意を固め」(II.20.643) るのだ。後にミスター・ミーグルズの許しを乞うタティコーラムは、ミス・ウェイド像を自分自身の将来の姿として的確に描き出す。

"I have had Miss Wade before me all this time, as if it was my own self grown ripe — turning everything the wrong way, and twisting all good into evil. I have had her before me all this time, finding no pleasure in anything but in keeping me as miserable, suspicious, and tormenting as herself." (II.33.787)

「これまでずうっと、あたしは目の前でミス・ウェイドを見てきました。まるで大人になったあたしを見ているみたいでした——何でもかんでもねじくれて考え、善いことをみんな悪く考えちゃうんです。これまでずうっと見てきて分かったんですが、あの女は、あたしを自分と同じように不幸で、疑い深くて、自分をいじめるのが好きな女にしておくことしか楽しみがなかったんです」

彼女はミス・ウェイドとの生活を通して、彼女を反面教師として学び、自己を矯正してきたのである。タティコーラムがミーグルズ一家から逃げ出したのも、結局のところ、少女の社会適合のために必要な一過程だったということになる。

タティコーラムがミス・ウェイドと同じ運命を辿ることから逃れ、ミーグルズ一家のもとに帰還するのは、以前に彼らが少女に施した矯正療法が、彼らが思っていた以上に効を奏した結果である。少女の内面に見られる、ミスター・ミーグルズが教え込もうとする理性と彼女本来の感情の葛藤は、第1部第2章からすでに描かれていた。そこでタティコーラムは初めて怒りという形で意思を表示するが、その怒りは、しだいに懲罰的な自己矯正の言動によって抑圧される。語りは「激しい叫び声」から「途切れ途切れのつぶやき声」(I.2.26) になる。動作は荒れ狂う挑戦的態度から自己抑制へと移行する。「半ば濡れた髪の毛と恥に満ちた顔を隠すため、半ばは悔恨の情に溢れた胸に抱きしめるものが何もないで、せめてそれで代用しているかのよう」(I.2.26) に、ベッドの掛け布を引き寄せる。この自己主張から社会規範への従属へといった変化は、作品全体を通してタティコーラムによって繰り返される。特に、ミスター・ミーグルズが教授する「25まで数えなさい」という方法は、少女の怒りを抑えるのに何度も有効に作用する。訓練によって規律は内在化され、再生産されるのである。

タティコーラムがミスター・ミーグルズに許しを乞う場面は、彼女への規律の訓練が最終的に成功した証しである。少女は前非を悔い、己が気性を「狂氣」(II.33.787)と認める。彼女は、昔の名前「タティコーラム」で呼んでくれるようにと願うだけでなく、「少しずつゆっくりと、いい子になります。一生懸命がんばります。25数えるどころじゃなくて、2,500でも25,000でも数えますよ！」と誓う。自ら積極的に欲求を抑圧し、ミスター・ミーグルズの教化策をさらに推し進めようとするのである。

こうしたタティコーラムの姿を我々は、幸福なものだとは容易に受け入れがたい。むしろ憐れみさえ覚える。この不安定さを我々が読み取るように、ディケンズは仕向けている。許しを乞うときも、少女は「なかば絶望して」(II.33.787)涙を流しながら叫ぶのである。彼女は、ミーグルズ一家への帰還に十分満足しているわけではない。なぜなら、それは、ミス・ウェイドによる監禁状態からもとの監禁状態への逆戻りでしかないからだ。しかし、生きてゆくために他の選択の余地はない。彼女は彼らに頼るしかないのである。支配-従属構造のなかから脱け出すことはできない。ミスター・ミーグルズやミス・ウェイドは、過去に、その構造のなかに少女を幽閉した。それからの脱出は、自らの激情が作り出す精神的牢獄に少女が囚われることを意味した。生きている以上、いくら逃れようとしても牢獄は何らかの形で彼女につきまとうのである。最終的に社会という牢獄を選んだ彼女は、ミセス・プローニッシュやジョン青年のようにして、慰安を見出さざるを得ないのである。

社会がタティコーラムの心情を理解することは決してない。あくまで彼女の方が社会適合に邁進しなければならない。最後にミスター・ミーグルズは彼女に、見習うべき模範としてエイミーを提示する。

“...I have heard tell, Tattycorlum, that her young life has been one of active resignation, goodness, and noble service. Shall I tell you what I consider those eyes of hers that were here just now, to have always looked at, to get that expression?”

“Yes, if you please, sir.”

“Duty, Tattycorlum. Begin it early, and do it well; and there is no antecedent to it, in any origin or station, that will tell against us with the Almighty, or with ourselves.” (II.33.788)

「タティコーラム、わたしの聞いたところでは、若い頃あの人は、自分の運命を進んで受け入れて、親切と気高い奉仕に献身していたのだそうだ。彼女の目が今見たような表情を湛えるまでには、いつも何を望みていたのだろうか？　わたしの考えを言ってみようか？」

「はい、どうぞ」

「義務だよ、タティコーラム。若いうちから義務を背負い、しっかりと果たすんだ。そうすれば生まれや身分が何だろうと、神さまはきっとそれをお褒めくださるし、自分

自身も満足できるのだ」

このとき、タティコーラムの絶望感はいや増すのではないだろうか。結局、以前と変わらず、自分を「他者」としてしか扱わない善良なミーグルズ一家のもとで、欲求を抑圧し、社会が孤児に要求する美德を身につけるを得ない。ミスター・ミーグルズは、外面上の美を重んじるあまり、「テーブルの飾りのなかでも格段に装飾的な部分」(I.16.192)として、二人のメイドを置いた。こうした美しい人形のようなメイドと同じように、タティコーラムは振る舞わねばならないのである。社会は彼女に歩み寄らず、それどころか監視の眼差しは以前にも増して厳しくなる。

結論——告発される利他愛

ディケンズは社会の問題点を指摘し、その石化した構造の犠牲者としてミス・ウェイドやタティコーラムを描き出す。周縁に位置する彼女たちは、社会にとって、混沌を引き起こす潜在的可能性を持った危険な存在なのである。社会は安定を維持するための一つの方法として、彼女たちを自分たちとは別個の存在として距離を置きつつ、規律を教え、飼い慣らさなければならない。ミス・ウェイドが、ミスター・ミーグルズからタティコーラムを引き離そうとするのは、社会のこうした圧制への反抗なのである。

だが、反抗は鎮められねばならない。作者は、ミス・ウェイドが自らの精神的牢獄を堅固にするばかりで、社会が押しつける支配－従属関係に代わる言説を、タティコーラムとの間に構築しない点を問題視する。それどころか、ミス・ウェイドは社会の言説を模倣するのみである。それは最終的に、タティコーラムを社会復帰に追いやる。そしてタティコーラムは、以前より厳しい監視のもと自己鍛錬によって、社会の従順な僕として生き続けなければならない。

結果として、迂遠省を核とし、それに追随するミスター・ミーグルズのような中産階級から成る中心世界は、ミス・ウェイドたちの反抗によつても少しも変わらない。ディケンズは、ミス・ウェイドの精神的こわばりを非とし、タティコーラムの改心を一義的には是としながらも、社会のこうした硬直性にも警鐘を鳴らすのである。

我々はこの両義性に注目しなければならない。重要なのは、ミス・ウェイドが現実社会を、生い立ちの記に記したように捉えているということ、また、タティコーラムが現実社会を、激情に身を任せて訴えたように捉えているということなのである。いつも寛大な許しを与える優しく善良な人々が、実際は自分たちだけその慈愛に満足を覚え、愛し助けてやろうとする当の相手の心情を理解せず、逆に彼らの憤慨を募らせている場合もあるかもしれないのだ。利他愛に満ちたヒロイン、エイミーも、その一人かもしれない。彼女も自己犠牲を通して、自己満足に浸っているかもしれない。我々は、そういう観点から、従来「汚れなき善良さ」*"untinctured goodness"*⁽⁸⁾を帯びた女性と言わされてきたエイミー像を再解釈してゆく必要があ

る。

注

本稿は、拙論「*Little Dorrit* 論—反抗する人々」『御輿員三先生退職記念論集』（京都：あぽろん社、1990）のミス・ウェイドに関する箇所をより詳細に論じたものである。

- 1 Edgar Johnson, *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*, vol. 2 (New York: Simon and Schuster, 1952) 883.
- 2 John Wain, "Little Dorrit," *Dickens and the Twentieth Century*, ed. John Gross and Gabriel Pearson (London: Routledge and Kegan Paul, 1962) 184; H. M. Daleski, *Dickens and the Art of Analogy* (London: Faber and Faber, 1970) 228; Geoffrey Thurley, *The Dickens Myth* (London: Routledge and Kegan Paul, 1976) 238 etc.
- 3 Jack Lindsay, *Charles Dickens: A Biographical and Critical Study* (London: Dakers, 1950) 331; Edmund Burgler, "Little Dorrit and Dickens' Intuitive Knowledge of Psychic Masochism," *American Imago* 14 (1957): 378-80 etc.
- 4 テクストは Charles Dickens, *Little Dorrit*, ed. Harvey Peter Sucksmith (Oxford: Clarendon, 1979) を使用。括弧に入れて、部・章・頁数を示す。
- 5 ミスター・ミーグルズ像については、「*Little Dorrit* 論—反抗する人々」、44-45頁を参照のこと。
- 6 John R. Reed, *Victorian Conventions* (Athens: Ohio UP, 1975) 254.
- 7 Paul D. Herring, "Dickens' Monthly Number Plans for *Little Dorrit*," *Modern Philology* 64 (1966): 50.
- 8 Lionel Trilling, introduction, *Little Dorrit*, The Oxford Illustrated Dickens (Oxford: Oxford UP, 1966) xv.